

抵抗の礫を受け留める
—金哲著『植民地の腹話術師たち』の邦訳を刊行して—
Accepting the Voice of the Resistance:
Afterword for Japanese translation of Kim Chul's *VENTRILOQUISTS*

渡辺 直紀
WATANABE NAOKI

武蔵大学人文学部
Faculty of Humanities, Musashi University

キーワード

植民地主義 朝鮮文学 金哲

Keywords

Colonialism; Korean Literature; Kim Chul

Quadrante, No.20 (2018), pp.51-53.

この特集は、2017年7月7日に東京外国語大学・海外事情研究所で開催された書評会「植民地朝鮮の小説エクリチュールとモダニティ——金哲『植民地の腹話術師たち』を読む」での議論をまとめたものである。書評会では、波田野節子氏（新潟県立大）、五味渕典嗣氏（大妻女子大）、柳忠熙氏（東京大）が提題者として発表し、それについて原著者である金哲氏がリプライした後、会場参加者と討論をおこなった。この特集では、その提題者の提題文を補完して掲載したほか、金氏にも、あらためて書評会での印象をもとに、新たに原稿を執筆してもらった。さらに、書評会で司会をつとめた渡辺が、冒頭にリード文的なエッセイを書き、また、やはり会に参加した逆井聡人氏（東京外大）にも傍聴記を寄稿してもらった。みなさんに感謝申し上げたい。

* * *

韓国文学研究者・金哲氏が本書『植民地の腹話術師たち』を執筆するに至った経緯やその意義、あるいは私が訳者として、本書の翻訳作業にかかわった経緯などについては、すべて本書の巻末に「訳者あとがき」として書いたので、ここでは、この邦訳が2017年3月に日本で刊行されてからこ

れまでの数か月の間に、私が接することになった、本書に対するいくつかの反応や反響について、私なりの考えを少し書き留めておきたい。

哲学者の鷺田清一氏は「人はなぜあえて曲解を押し通すのか。見たいものしか見ないという偏狭と、自国語への埋没は、世界の表情を歪にする。自分を相対的なものとして認めるのが怖いのだ」としながら、この邦訳の序文にある金哲氏のことばを引いて、とても短いながらも、本書の内容とその意義について肯定的に評価してくれた¹。とてもありがたく、また的確な意見であると、訳者としてもそう思った。

ただ、朝日新聞の一面に掲載されたこの鷺田氏のコラムを見て、日本の読者たちは何を思っただろうか。おそらくは、金氏が本書で説明している、植民地朝鮮の文学状況に思いを致すよりは、昨今の日本の国内外の、嫌悪に満ちた感情や情動、根拠なき差別や排外主義の言質が乱舞する世論やウェブ空間の荒涼としたムードを思ったにちがいない。本書の訳者である私もそう思ったし、本書の著者である金氏ですら、韓国における同様の状況を連想したかもしれない。

¹ 鷺田清一「折々のことば (828)」『朝日新聞』（2017年7月30日朝刊）。



その反応はおそらく正しかったし、それ以外の反応を期待することは、韓国の歴史や文学に格別の関心を持っている人を除いて、現在の日本では不可能に近かったにちがいない。だが、いみじくも、先の鷺田氏が指摘しているように、本書はまづもって、現代の韓国社会で、韓国の研究者である金氏が、韓国の文学史に対する理解の変更を要求する礫だった。本書の全13章にわたって言及されている、韓国の近代文学史の断面は、ひとつ残らず、現在の韓国の近代文学史で言及される、とても重要な文学者とその作品によって示されているが、金氏の議論の仕方、すなわち、植民地主義やモダニティの問題に、作家や文化人がどのような形で戦ったり挫折したりしたか、そのさまざまな多様性と現代的な意義についての議論は、韓国の国語教科書や大学の文学史の講義などでは、かなり等閑視されている（日本における文学史理解も大同小異だと思うが）。結果、韓国について、やや極端なことを言えば、抗日運動の歴史や、民族主義運動との関連が、可視的に確認できる文学作品が言及され続けることになる（北朝鮮の文学史では、そのような面がさらに極端に見られる）。それらの作品は紛れもなく、韓国・朝鮮文学における重要な作品である。しかし、その作品が、他のどのような作品や言説のなかで存在したかがわからなければ、それらの作品を現代において読む意義も半減するというものである。

だが、金氏が投げたその「礫」が、他でもない日本語に翻訳されることで、どのような波紋が生じるか、あるいは端的に、私の翻訳者としての作業が、日本の読者にどう映るか、いささか不安に思うところもあった。たとえば、私はこの邦訳のタイトルを「植民地の腹話術師たち」とし、その副題を「朝鮮の近代小説を読む」とした。本書の原題「腹／複話術師たち——小説で読む植民地朝鮮」と、さほど変わらないかもしれないが、実は前者にはやや誇張がある。植民地＝近代とも受け取られかねないタイトルだからである。この点も韓国ではこれまでさまざまな議論があった。古くは1970年代の自律的發展論から、昨今の植民地近代化論批判にいたるまで枚挙に暇がない。にもかかわらず私がこのようなタイトルにしたのは、ひとつの大きな事実を看過することは、できるだけ

避けたかったからである。

つまり、朝鮮半島の「近代」を語るとき、植民地経験に対する参照と検討が欠かせないことをあえて強調したかったのである。さらにそこでの経験は、朝鮮半島がかつて植民地であったという事実を越えて、いわゆる植民地宗主国の国民国家建設や国民形成の経験ともきわめてパラレルに議論できる、いや、さらに誇張を恐れずに言えば、植民地人こそが「国民」であり、「国民」こそ植民地人なのではないかということを考えたかったのである。突拍子もない発想かもしれないが、しかし、私が本書を翻訳しながら、徐々に抱くようになったそのような思いを、作家の円城塔氏や日本史学者の成田龍一氏は、本書に対する書評で、実に鋭利に指摘してくれ、翻訳者冥利に尽きるところ並々ならぬものがあつた²。

さらに私が本書の邦訳者として鼓舞されたのは、2017年7月7日に東京外国語大学の海外事情研究所で開催された、本書に対する書評会での議論だった。ここで提題者をつとめた、波田野節子氏（朝鮮文学）や五味渕典嗣氏（日本文学）、柳忠熙氏（朝鮮思想史）は、それぞれの関心分野とこの邦訳での議論が、どのようにオーバーラップして、いかに問題적であるかについて、実に興味深いやり方で指摘してくれた。その議論の詳細は本誌に掲載されている各氏の議論を参照してほしいが、三人の評者が共通して関心を示したのが、第12章の金史良や張赫宙など在日本朝鮮人文学の作家についての議論だったことは、彼らの作品がこれまで、日本（語）でずいぶん読まれてきたことを考えれば、きわめて自然かつ当然のことだったかもしれない。しかし、三人の書評者は、それぞれスタイルは異なりこそすれ、みな、この第12章に登場する植民地朝鮮の作家らの、あるいは本書の著者である金氏の「礫」を念頭に入れた議論をしてくれた。

さらに、書評会に作家の温又柔氏が来て、発言してくれたことも印象深かった。作家が、日夜、言葉といかに格闘しながら、他者とつながっているか／いけなかにいかに苦しむのかについて

² 円城塔「言葉の強制、拒否と受容の間——金哲著『植民地の腹話術師たち——朝鮮の近代小説を読む』『朝日新聞』（2017年5月28日）、成田龍一「金哲『植民地の腹話術師たち』、あるいは植民地経験の考察について」『UP』（東京大学出版会、2017年8月）。

語りながら、本書での議論の核心である、作家の「腹話術師」的なあり方が、ひとえに植民主義に端を発した問題でありながらも、さらに開かれた普遍的な問いを投げかけていることを指摘してくれた。おそらく温氏が考えていたことは、あの書評会に来てくれていた他の多くの人々（外大での行事だけに他の外国文学の専攻者の出席も目立った）に共通した思いだったにちがいない。

本書で言及されている韓国・朝鮮文学の作品には、すでに邦訳されているものもいくつかあるが、重要なもので翻訳されていないものも結構ある（たとえば第13章の、在朝日本人の引揚げを扱った作品など）。訳者として今後、そのような作品がかかえる問題性も日本（語）の読者が共有できるように、きちんとした日本語で訳出できれば、本書が投げかける問題について、さらに突っ込んだ議論が、日本と韓国との間で可能かもしれない——そのようなことも夢想してみるのである。